



第1回的女子卒業生 1951年(『婦人の友』掲載、『東京美術学校百年史 第三巻』より)

東京芸術大学美術学部1951年

## 自由と平和

佐藤道信

日本近代美術史。主要著書『日本美術 誕生 近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術 美の政治学』

九五一年三月二十三日、六十一回目をかぞえた卒業式は、華やかな卒業式になった。はじめて本学から女子学生が卒業したのである。すでに三年前、東京美術学校は新制の東京芸術大学美術学部となっていた。この年、美術学部を卒業した女子学生は三五名。男女同権、自由と平和の時代を告げる彼女たちの旅立ちには、雑誌でも取り上げられて話題になった。『婦人の友』にのった八人の卒業生(1)は、油画の安井曾太郎と梅原龍三郎、彫刻の石井鶴三研究室の人たちらしい。石膏室で撮ったのだらう。うしろにミロのヴィナスと、ミケランジェロのモーゼの彫像が見える。とても芸大っぽい景色のひとつだ。

彼女たちが入学したのは、終戦翌年の春だった。本学では戦前にも、男女共学の実施を何度か申請していたらしい。それが敗戦を経て、GHQの教育改革によって実現したのである。この写真が輝いているぶんだけ、戦争に散った学生がここまで生きていたらと思ってしまう。というのも前号での久保克彦も、同じこの石膏室で写真を撮っていたからである(芸大通信5)。彼らにとってこの場所は、芸術と自由のシンボルだったのかもしれない。彼女たちが入学した年の入試は、志願者六八九名中、女性が一 名をこえていたという。合格者は一八五名で、そのうち三七名が女性。ちょうど五分の一が女性だったことになる。ただこの年の入試は、終戦直後の混乱期のためやや変則的なものだったようだ。受験者が年齢も美術の経験度もバラバラだったため、とりあえず多数を合格として、予科の一年間で「適正」を見たうえで、学年末試験で厳しい成績判定をしたらしい。そのためこの学年の学生数は、卒業時点で約三分の二に減っている。女子学生が、入学時の三七名から、卒業時に約二五名に減っているのも、こつた事情による。比率としてはほぼ同じ。ただ成績は、一体に努力家の多かった女性のほうがよかったらしい。ある学科では、トップから上位すべてが女子学生だったという。この傾向は、少なからず現在にも続いている。また詳しい経緯はわからないが、この学年の女子学生のなかで鳩山(渡辺)信子が、

実は一人だけ前年の春に卒業している。正確には彼女が、女子卒業生の第一号ということになる。

規律の厳しい女学校から入学して来た女子学生にとっては、野放図なまでに自由な校風が、まず衝撃だったらしい。入学したのはいいが、女子の控室もなければトイレも共用。復員したての学生もいた。初めは緊張の毎日だったらしい。学校は男女交際には一切関知せず、問題を起こしたら即刻退学の方針をとった。実際そうだった例もあつたようだが、逆に女性で親切にしてみらうことが多かったと回想する人もいた。男子学生にとっては、たぶんうれしはすかしが本音だったらう。男女二人でとった写真(2)は、そんな彼らの気持ちが初々しい感じに表れた、とてもいい写真だ。研修旅行で配給物資を運ぶ彼らの表情も、明るく力強い(3)。最低限の貧しさのなかで、すき通るような希望が輝いている。芸術は、やっと自由と平和の時代を手にしたのだった。

(とつとつ・とつしん/美術学部芸術学科助教授)

右：戦後第1回入学生(平出敏子氏提供、『東京美術学校百年史 第三巻』)

下：配給物資を運ぶ学生たち(1946年7月の高山夏季研修会、『東京美術学校百年史 第三巻』)



# タイムカプセルに乗っ

今

からちようど一

年前の一九三三年（明治三十

六）七月二十三日、日本人初のオペラ公演として

グルックの「ホルフェオ」が奏楽堂でこなわれた。こ

のとき、東京帝大で哲学を講じ東京音楽学校ではピアノ

を教えていたラファエル・フォン・ケーベルが、ピアノ

伴奏者として参加した。この公演は学生の発意によるも

ので、音楽学校からは奏楽堂を貸す以外に何の支援もな

かった。ケーベルは根柢からの絶対音楽の信奉者であっ

たので、オペラには興味を持っていなかったが、学生た

ちの逸る熱意にほだされてつきあつたのである。フラ

ンス人講師ノエル・ペリが指揮者として音楽の全体をま

とめ、資金は学生のひとりの兄が出した。エウリディー

チエ役を歌った三浦環によれば、上演は成功だったが

「一部の知識階級の間での文化運動に終わり、社会的反

響を及ぼさずに終わったことは残念だった」という。切

符の一般売りはなく、父兄と関係者が招待された。今で

はこの「ホルフェオ」初演は、日本の洋学史に残る快挙

として高く評価されている。

一九三九年（昭和十四）に来日して藤原歌劇団の指揮

などをしたマンフレート・グルリットが東京音楽学校で

だが、「上野の生徒に白粉をつけさせぬ」とオペラ出演

を禁止したかつての乗杉校長の言葉が、呪いのように生

きていて、このときも演奏会形式で十分だとする意見も

学校内部から出て、推進グループの足を引っ張った。公

演マンフレットに柴田睦睦は、憤懣やる方ない口吻で、

「少なくとも歌劇に関する限り、封建的で無智な因習の犠

牲でしかあり得なかった音楽学校時代はさておき、芸術

大学と名のつく時代になっても、音楽学部の中に歌劇の

正常な発展が望めなかったのは一体何の罪だろうか」と

書いている。主役のヴィオレッタは七人、アルフレッド

は二人が交替で歌った。新聞各紙は「予想以上の出来」

に賛辞を惜しまなかった。しかし、「清潔な歌いぶりへ椿

姫」という『毎日新聞』の見出しは、当時の風潮をよく

あらわしている。オペラの熱い愛情表現よりも、清楚に

歌つことを世間も求めていたからである。柴田のいう

「封建的で無智な因習」を乗り越えるのは、前途多難であ

ったのだ。（たさい・けいこノ演藝芸術センター助手）

東京芸術大学音楽学部1956年

## 芸大オペラ 第1回公演

瀧井敬子

音楽学（ドイツロマン派、および日本洋楽草創期の研究）主要論文「幸田露伴と音楽、そして妹の延」「東西音楽の接点 音楽におけるジャポニズムの一段面」「森鴎外とオペラ」



芸大オペラ公演第1回プログラム表紙

リハーサル風景。右はルッチ指揮芸大音楽学部学生オーケストラ、下2枚は歌手たちの立稽古

